

## 論文審査の結果の要旨

氏名：藤本 かおる

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：日本語教育において同期型のオンライン授業を効果的に行うための研究  
—初級レベルを中心に—

審査委員：(主査) 教授 保坂 敏子 ㊞  
(副査) 教授 島田 めぐみ ㊞  
(副査) 教授 古賀 徹 ㊞

### 論文審査要旨

#### 1. 本論文の主題と構成

本研究は、日本語教育における同期型オンライン授業に関して、COVID-19のパンデミック（以後コロナ禍）の最中にオンライン授業を経験した日本語教師を対象に調査を行い、実践を通して感じた認識や問題点、特に問題が多かった初級レベルの授業活動を分析することにより、初級レベルの日本語教育における効果的かつ意欲的な同期型オンライン授業の実現に向けた提言を目指すものである。本論文は9章から構成されている。内容は以下の通りである。

##### 第1章 研究の背景と目的

- 第1節 研究の背景
- 第2節 本論の研究課題
- 第3節 研究の方法
- 第4節 データの分析方法
- 第5節 言葉の定義
- 第6節 本論の構成

##### 第2章 先行研究（1）他分野での同期型システムに関する研究

- 第1節 教授メディア利用の利点
- 第2節 同期型システムについて
- 第3節 同期型システムでの教育活動方法
- 第4節 工学分野やシステム開発分野の先行研究
- 第5節 Video-Mediated Communication (VMC) に関する先行研究
- 第6節 語学教育における同期型システムに関する研究
- 第7節 同期型システムに関するその他の研究とこれまでのまとめ
- 第8節 コロナ禍の取り組みから得られた知見
- 第9節 調査結果を考察するための理論的枠組み

##### 第3章 先行研究（2）日本語教育における同期型システムに関する研究

- 第1節 同期型システムを用いた遠隔交流授業に関する研究
- 第2節 同期型システムを使ったオンライン授業の実践に関する研究
- 第3節 日本語での遠隔接触場面におけるコミュニケーションの特徴
- 第4節 日本語教師とICTの活用に関する研究
- 第5節 コロナ禍以降の日本語教育におけるオンライン授業に関する研究
- 第6節 総括

##### 第4章 コロナ禍における日本語教師のオンライン授業に対する困難感の調査

- 第1節 調査の目的
- 第2節 調査時期と調査方法
- 第3節 調査協力者について
- 第4節 2020年春時期の日本語教育現場における授業のオンライン化の状況

第5節	オンライン化に対しての所属組織や部署で教師研修について
第6節	授業をオンライン化することに対してどのような不安を感じているか
第7節	オンライン化のための授業の見直しについて
第8節	同期型システムを使った授業を行うことに対して感じている困難感
第9節	考察
第5章	オンライン授業で起こった問題とその対処法に関する調査
第1節	調査の目的
第2節	調査方法について
第3節	調査対象者について
第4節	オンライン授業で問題を感じる授業レベルや具体的な内容について
第5節	それぞれの表札及びラベルにおいて実際に起こった問題について
第6節	問題への対処法について
第7節	まとめ
第6章	初級レベルのオンライン授業での教室活動の特徴に関する調査
第1節	調査の目的
第2節	調査方法
第3節	調査協力者と振り返りに記入された授業について
第4節	本論における改訂版タキノミーの知識次元サブカテゴリーの設定
第5節	改訂版タキノミーによる教室活動分析とその結果
第6節	考察
第7章	教師の授業の振り返りから見る初級オンライン授業が対面授業より勝る点と劣る点
第1節	調査の概要
第2節	認知プロセス次元別の分析1：「記憶する」
第3節	認知プロセス次元の分析2「理解する」
第4節	認知プロセス次元の分析3：「応用する」
第5節	ハイブリッド授型業に見られた問題
第6節	分析の結果と新たに見えてきた視点
第8章	第6章と7章からの初級オンライン授業についての考察
第1節	考察の視点
第2節	カメラとマイクの使用を含めた学生のICT環境に関する問題
第3節	学生把握ができない問題について
第4節	オンライン授業で行うことが難しい教室活動について
第5節	総括：SAMRモデルから見る2020年の初級レベルのオンライン授業と今後の課題
第9章	結論 同期型システムを初級レベルの日本語教育に効果的かつ意欲的に導入するために
第1節	本章の構成
第2節	効果的なオンライン授業のデザインに向けて導入すべきもの
第3節	同期型オンラインシステムを有効活用するために必要なリソース
第4節	結論
第5節	本研究の意義と限界点
引用文献	
資料	

## 2. 本論文の概要

第1章においては、研究の背景、研究課題、研究の方法、データ分析の方法、用語の定義、論文の構成が示されている。本論文で設定された研究課題は以下の5つである。

- (1) コロナ禍において授業のオンライン化を迫られた教師は、授業をオンラインにするにあたり、どのような点に困難を感じたのか。
- (2) 同期型システムでのオンライン授業において、日本語教育ではどのようなレベルや科目で問題が起りやすいのか。そして、問題が発生したとき、解決できない問題にはどのような傾

向があるのか。

- (3) 同期型の初級オンライン授業の教室活動の特徴は何か。そして、それが同期型オンライン授業にどのように影響しているのか。
- (4) 初級レベルにおいて、同期型システムでのオンライン授業が対面より勝る点と劣る点はどのようなことなのか。
- (5) 研究課題 2 から 4 を踏まえ、初級レベルにおいて効果的にオンライン授業を行うためには、どのような授業デザインが必要であり、そのためにはどのようなリソースが必要なのか。

第 2 章においては、「先行研究 (1)」として、日本語教育以外の他分野における同期型システムに関する研究と遠隔教育に関する理論についてまとめている。他分野としては、工学およびシステム開発分野とビデオを介した双方向のコミュニケーションに関する研究、日本語以外の語学教育における同期型システムに関する研究を取り上げ、最後に、本研究の調査結果を分析するための枠組みとして、教育における ICT 活用のレベルを示す SAMR モデルを紹介している。

第 3 章においては、「先行研究 (2)」として、日本語教育における同期型システムに関する研究として、同期型システムを使った遠隔交流授業とオンライン授業を整理し、遠隔接触場面のコミュニケーションの特徴について紹介し、日本語教師の ICT 活用に関する研究をまとめて、教師が ICT を活用するために求められる条件を整理している。そのうえで、コロナ禍以降の研究を確認し、コロナ禍後における本研究の意義を探っている。

第 4 章においては、研究課題 1 について、コロナ禍に入りオンライン授業の開始を迫られた日本語教師に対してアンケート調査を行い、授業をオンライン化する際に抱いた困難感について明らかにしている。収集したデータは、回答者の身分により 3 つのグループ (非常勤教師・専任教師・組織運営者) に分けて KJ 法を用いて分析し、困難感の様相とその原因を探っている。

第 5 章においては、研究課題 2 について、オンライン授業をある程度実施した日本語教師に対し、同期型システムを使ったオンライン授業において、どのような科目やレベルで問題が起き、その中で解決できない問題があるかについてアンケート調査を行った。KJ 法を参考に分析を行った結果、初級レベルで問題が一番多く発生することが明らかになった。そこで、第 6 章～第 8 章では、初級レベルのオンライン授業について検討している。

第 6 章は、研究課題 3 に関して、授業振り返りシートを用いて調査協力者から初級レベルのオンライン授業に関する振り返りデータを収集し、改訂版タキソノミーを枠組みに分析している。その結果、初級レベルの同期型オンライン授業は、ブルーム・タキソノミーの「精神運動領域」に当たる活動が多いという特徴があり、そこではノンバーバルコミュニケーションが必要とされるが、それは同期型システムでは最も伝達しにくいものであることを示している。

第 7 章においては、研究課題 4 について、第 6 章の授業振り返りシートの中のオンライン授業が「対面より良かった点」「対面より良くなかった点」に対する自由記述回答を KJ 法で分析している。その結果、教師がオンライン授業で良かったとした点は、ICT を活用する際の良さであること、そして、良くなかったとした「学生把握ができない」という点については、同期システムの技術的な限界であるとしている。

第 8 章においては、研究課題 3 と 4 の考察として、第 6 章と第 7 章の検討結果について考察を行っている。考察には、「e ラーニングの質保証のレーヤーモデル」「交流距離理論」「プレゼンス理論」「同価値理論」を用いている。最後に、SAMR モデルで、コロナ禍における初級オンライン授業を概観している。

第 9 章「結論」においては、研究課題 2 ～ 4 の結果を踏まえた研究課題 5 として、初級レベルのオンライン授業を効果的かつ意欲的に導入することを目指す 6 つの提案を示し、その実現に必要な 3 つのリソースを提示している。

### 3. 本論文の成果と問題点

コロナ禍により、オンライン授業は急速に広まった。特に、同期型オンライン授業については、使い勝手のいい同期型システムの普及が授業のオンライン化を促進した。しかし、コロナ禍の終息により、オンライン授業はその効果の検証が十分なされないまま、通学制の課程ではあまり実施されなくなった。そのような中、今度は ChatGPT をはじめとする生成 AI が教育や社会を翻弄している。テクノ

ロジーは日々目覚ましい進化を遂げ、日常生活と切り離すことができなくなっており、今後 ICT の教育利用はますます避けられないものになると予測される。ICT をいかに効果的に、魅力的に、創造的に活用するかは今後の大きな課題である。この観点から、本研究は同期型オンライン授業の効果的な実践のためのエビデンスを示すものであり、重要な研究だと位置づけられる。特に、以下の2つの成果は高く評価することができる。

第一に、コロナ禍中に広く実施された同期型オンライン授業に関する教師の認識を調査・分析することにより、実践知を可視化できた点である。コロナ禍の前にも、同期型オンライン授業は実施されていたが、その数は少なく、その検証も個別的な性格のものであった。本研究では、コロナ禍中に同じような経験をした多くの日本語教師に対する調査により、同期型オンライン授業の困難さや問題点、特に問題となるレベルが初級であることなどが明らかになった。さらに、初級レベルが問題となる原因についても検討された。これらは、今後の効果的な同期型オンライン授業の実現に向けた有益な情報となる成果である。

第二に、アンケート調査や振り返りシートで収集したデータを、多様な分析方法により丁寧に分析できた点である。KJ法は、データに語らしめる分析方法で、同期型オンライン授業の教育現場で起きたことや教師が感じたことをそのまま結果として図式化できるため、より実践知に近い結果が示せたと思われる。また、改訂版タキソノミーは、知識次元と認知プロセス次元の両面から細分化されており、授業における認知分野の問題点を複眼的に明らかにすることができた。

しかしながら、本研究にはいくつかの課題も残されている。まず、本研究では、効果的な授業デザインに向けた提言ということを最終目標にしていたため、分析結果の要因などをあまり深く検討することなく、処方箋的な結論を導く方を重視した点が挙げられる。また、緊急事態へ対応せざるを得なかったコロナ禍という特別な状況での経験の分析であり、授業のオンライン化の検討に十分時間がかけられなかった限られた状況での認識や問題点である可能性もある。今後平時の状態での同期型オンライン授業を対象にしたさらなる調査が必要であろう。以上のような課題が残されているものの、それらは本論文の学術的成果の価値を損なうものではない。

以上のことから、ここに審査員一同は、本研究が日本語教育における初級レベルの同期型オンライン授業の研究や実践に大きな貢献を果たすと判断する。よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令 和 6 年 7 月 1 5 日